

# 『アントニーとクレオパトラ』における韻文と散文 ——本文確定に伴う諸問題

佐藤達郎

## I はじめに

本報告は、成城大学国際編集文献学研究センター主催のイベント「シェイクスピア戯曲編集のプラクシス—大修館シェイクスピア双書 第2集／第2期 出版記念イベント」（2024年6月15日於成城大学）において、筆者が発表した内容に基づいている。2023年に「大修館シェイクスピア双書 第2集」が刊行され、筆者は、『アントニーとクレオパトラ』の編注を担当した。「第2集」の編集方針が、「第1集」（1980年代刊行）の方針と大きく異なるのは、前者においては、編注者が本文を確定する作業を行ったという点にあった。第1集の場合、ピーター・アレクサンダーが編纂したシェイクスピア全集（1951）の本文をそのまま使用し、大修館版のテキストとすればよかったのに対し、今回の「第2集」では、近代初期に印刷されたシェイクスピアの最も古い版（あるいはそれに準ずる版本）を底本としながら、あらためて編注者が本文を確定するという作業が必要であった。以下、『アントニーとクレオパトラ』の本文を確定する際に生じた書誌学上の問題点の一つを検討していきたい。

## II 『アントニーとクレオパトラ』（大修館、2023年）の底本と三つの問題点

今回筆者が編注したシェイクスピア『アントニーとクレオパトラ』（大修館、2023年）の本文を確定する上で依拠した版本は、1623年に出版されたThe First Folioと呼ばれるシェイクスピア戯曲集であり、このThe First Folio（以下F1）という印刷本に収められた“The Tragedie of Anthonie, and Cleopatra”が底本であった。

図A：F1（“The Tragedie of Anthonie, and Cleopatra”）

↓（筆者による校訂）

大修館版『アントニーとクレオパトラ』

上記図Aのように、F1の“The Tragedie of Anthonie, and Cleopatra”に印刷された活字を見ながら、本文を確定していったわけだが、その際、大きく分けて、次のような三つの問題点に直面した。

1. F1に印刷されたパンクチュエーションをどう処理するのか。
2. F1で示されたト書きだけでは不十分であり、それをどう補うのか。
3. F1を見ただけでは、韻文と散文の区別が判然としない箇所があり、それをどう処理するのか。

1のパンクチュエーションに関しては、コロンを多用したF1の本文を、そのまま大修館版に採用すれば、現代の読者は相当な違和感を感じるに違いない。従って、F1のコロンを、読者にとって読みやすくするためには、文脈に応じてセミコロンやピリオドに変えていく必要があった。2のト書きの場合、F1においては、ト書きが書かれていないために舞台上で何が起きているのかわからないような箇所がいくつか散見された。こうしたパンクチュエーションやト書きの問題は、それぞれ独立した論考で論じるべき大きな問題をはらんでいるので、ここでは紙面の都合上、3の「韻文と散文の区別」について取り上げてみたい。

### III 韻文と散文の区別

#### (1) 本文編纂の流れ

F1の“The Tragedie of Anthonie, and Cleopatra”が印刷された際、当時の植字工が参照したのは、シェイクスピアの自筆原稿またはその写しだと推定されている (Bevington 271)。従って厳密に言えば、次のような段階を経て、大修館版『アントニーとクレオパトラ』の本文が編纂されたことになる。

図B：

シェイクスピアの自筆原稿またはその写し

↓ Stage 1 (植字工B、植字工E)

The First Folio (“The Tragedie of Anthonie, and Cleopatra”)

↓ Stage 2 (筆者による校訂)

大修館版『アントニーとクレオパトラ』

図BのStage 1では、当時の植字工が、シェイクスピアの自筆原稿またはその写しを見ながら活字を組み、F1の“The Tragedie of Anthonie, and Cleopatra”の版本を作成していったと推定される。T. H. ハワード=ヒルの推定によれば、Stage 1では、ベテランの植字工Bと見習いの植字工Eの二人が分業で活字を組み、後者の担当は、2幕2場60行—2幕6場74行、2幕7場55行—3幕6場33行（行は大修館版の行数）であり、それ以外の担当は植字工Bであった (Howard-Hill 7)。

#### (2) 韻文と散文の区別が孕む問題

##### (2)一a prose interjectionsか植字工の誤りか？

この図BのStage1における問題点の一つは、植字工B、Eが、何らかの理由で（ケアレスミス、あるいは、韻文を散文にすることでスペースを稼ぐ）、本来韻文とすべきところを、散文にしてしまっている箇所があるという点である。しかしながら、ここでもう一つ重要なのは、この作品に頻繁に現れる prose interjections という現象が、この植字工の作業に伴う問題をさらに複雑にしているということである (Wilders 80)。

prose interjections とは、韻文の会話に、突然散文が挿入される現象のことで、

次の引用 (A) の下線部 (a) と、引用 (B) の下線部 (a) がその一例である。引用 (A) と引用 (B) は、全く同じ箇所、前者が、F1の “The Tragedie of Anthonie, and Cleopatra” から、後者が、筆者が編集した大修館版からの引用である。

引用 (A) : F1 TLN 745-765

*Cæs.* (b)You praise your selfe, by laying defects of iudgement to me: but you patcht vp your excuses.

*Anth.* Not so, not so:

I know you could not lacke, I am certaine on't,  
Very necessity of this thought, that I  
Your Partner in the cause 'gainst which he fought,  
Could not with gracefull eyes attend those Warres  
Which fronted mine owne peace. As for my wife,  
I would you had her spirit, in such another,  
The third oth' world is yours, which with a Snaffle,  
You may pace easie, but not such a wife.

*Enobar.* (a)Would we had all such wiues, that the men might go to Warres with the women.

*Anth.* So much vncurbable, her Garboiles (Cæsar)  
Made out of her impatience: which not wanted  
Shrodenesse of policie to: I greeuing grant,  
Did you too much disquiet, for that you must,  
But say I could not helpe it.

*Cæsar.* I wrote to you, when rioting in Alexandria you  
Did pocket vp my Letters: and with taunts  
Did gibe my Misiue out of audience.

引用 (B) : 大修館2. 2. 60-80

Caesar (b)You praise yourself 60  
By laying defects of judgement to me, but  
You patched up your excuses.

Antony Not so, not so.

I know you could not lack – I am certain on't –  
Very necessity of this thought, that I,  
Your partner in the cause 'gainst which he fought, 65  
Could not with graceful eyes attend those wars  
Which fronted mine own peace. As for my wife,  
I would you had her spirit in such another;  
The third o'th' world is yours, which with a snaffle

You may pace easy, but not such a wife. 70  
 Enobarbus (a) Would we had all such wives, that the men might  
 go to wars with the women!  
 Antony So much uncurbable, her garboils, Caesar,  
 Made out of her impatience – which not wanted  
 Shrewdness of policy too – I grieving grant 75  
 Did you too much disquiet. For that you must  
 But say I could not help it.  
 Caesar I wrote to you  
 When rioting in Alexandria; you  
 Did pocket up my letters, and with taunts  
 Did gibe my missive out of audience. 80

この引用箇所は、シーザーとアントニーの会見の場面。引用 (A) 下線部 (a) のように、二人の韻文の台詞に、アントニーの家臣イノバーバスの喜劇的な散文が入ってきている (Would we had all such wives, that the men might go to Warres with the women)。これが、prose interjections と呼ばれる現象である。この場面全体は、アントニーとシーザーの会話が中心となり、両者の台詞はいずれも韻文で語られているが、そうした韻文の世界に、突如イノバーバスの散文が現れる。これは、作者が、劇的効果として、意識的に韻文の世界に散文を混入させているのであって、例えば、上記のイノバーバスが語る下線部の場合、散文を混入することによって、韻文で語られていたシーザーとアントニーの深刻な政治的駆け引きを揶揄する喜劇的効果が発揮され、そうした効果からいって、このイノバーバスの台詞は、F1に印刷されている通り、散文のままにしておくのが妥当であろう (大修館版でも、この部分は散文にした) (Wilders 80)。このイノバーバスの台詞のように、『アントニーとクレオパトラ』では、韻文の間に、不意に散文が入り混じる prose interjections と呼ばれる現象が非常に多いのである。

一方、引用 (A) の下線部、上から1-2行目のシーザーの台詞を見てみよう (下線部 (b): You praise your self, by laying defects of iude-gment to me)。F1では、このシーザーの台詞は韻文ではなく、散文として印刷されている。しかしながら、この場面は、前述の通り、アントニーとシーザーが終始韻文で語っている場面であって、緊張感あふれる両者の駆け引きという文脈から言っても、prose interjectionsではなく、韻文にすべき台詞であろう。このように、韻文にすべき箇所が散文になっているのは、おそらく活字を組んだ植字工の誤りか、あるいは、韻文を散文に変えることで、そのページのスペースを儉約して文字を詰め込みたかったのか、などの理由が考えられる。これらのことを踏まえ、大修館版では、このシーザーの二行の台詞については、散文から韻文に修正している (引用 (B) 下線部 (b))。特にこうした箇所、つまり本来韻文にすべきところを植字工が散文にしてしまっている箇所は、ベテランの植字工Bと比べて、未熟な植字工Eが担当した台詞に多い。したがって、Eが活字を組んだ2幕2場60行-2幕6場74行、2幕7場

55行-3幕6場33行 (TLN 744-1266, 1395-1785) については、特に注意を払う必要があった。植字工の仕事の特性が、テキストの校訂にも影響する一例であろう。

このように『アントニーとクレオパトラ』という作品は、韻文の箇所に散文が入り混じっていることが多く、しかもその散文の挿入が、prose interjections という意図的効果のためなのか、植字工の単なる誤り（あるいは応急措置）なのか、つまりF1に印刷された散文のままで良いのか、その散文を韻文に変えなければいけないのか—そうした識別をすることが極めて難しいのである。

(2)-b prose interjections か half lines か

続いて引用 (C) を見てみよう。2幕6場の冒頭のシーザーとポンペイの会話の大修館版からの引用である。

引用 (C) : 大修館 2. 6. 5-8

Which if thou hast considered, let us know 5

If 'twill tie up thy discontented sword

And carry back to Sicily much tall youth

That else must perish here.

POMPEY (空白) To you all three,

(下線部と (空白) という文字は筆者による)

下線部の That else must perish here と To you all three は、それぞれ half line と言って、韻文1行分を、複数の登場人物で分けて読む例である。この場合、シーザーの That else must perish here という台詞と、ポンペイの To you all three という台詞を合わせて1行と数えるため、POMPEY という登場人物名と To you all three の間に、わざわざ空白が設けられている。この空白は、That else must perish here と To you all three がそれぞれ half line であることを、視覚的にわかりやすく示すための工夫であり、この half lines の視覚的な明示は、19世紀以降の版において頻繁に用いられた (Wilders 80-81)。その一方、F1では、half lines を示すための空白が設けられていない。例えば、F1では、このシーザーとポンペイの会話の冒頭部分は、次のように印刷されている (引用 (D))。

引用 (D) : F1 TLN 1180-87

Which if thou hast considered, let vs know,

If 'twill tye vp thy discontented Sword,

And carry backe to Cicelie much tall youth,

That else must perish heere.

*Pom.* To you all three,

このように、F1では、To you all three の前に、half line であることを示す広いスペースが設けられていない。そのため、To you all three という句が、half line であるのか、あ

るいは韻文中に挿入された *prose interjections* なのか、区別がつきにくい場合が生じてくる (Bevington 275-80, Wilders 80-84)。

次の引用 (E) は、2 幕 5 場のクレオパトラと使用者の会話の場面で、F1 からの引用である。この箇所以外は、すべて韻文で語られているため、大修館版では、引用 (F) にあるように、下線部を全て *half lines* として処理したが、韻文中に挿入される *prose interjections* としても良い場面であり、一体どちらにして良いのか、正直いって正確な判別ができなかった。引用 (F) の下線部 *He's bound vnto Octauia* から *What say you?* までを、全て散文 (*prose interjections*) と考え、視覚的には、引用 (E) のようにしておくことも可能であろう。

引用 (E) : F1 TLN 1095-1106

*Mes.* Free Madam, no: I made no such report,  
He's bound vnto Octauia.

*Cleo.* For what good turne?

*Mes.* For the best turne i'th' bed.

*Cleo.* I am pale Charmian.

*Mes.* Madam, he's married to Octauia.

*Cleo.* The most infectious Pestilence vpon thee.

*Strikes him downe.*

*Mes.* Good Madam patience.

*Cleo.* What say you? *Strikes him.*

Hence horrible Villaine, or Ile spurne thine eyes

Like balls before me: Ile vnhaire thy head,

引用 (F) : 大修館 2. 5. 58-65

Messenger Free, madam? No! I made no such report.

He's bound unto Octavia.

Cleopatra For what good turn?

Messenger For the best turn i'th' bed.

Cleopatra I am pale, Charmian. 60

Messenger Madam, he's married to Octavia.

Cleopatra The most infectious pestilence upon thee!

*Strikes him down*

Messenger Good madam, patience.

Cleopatra What say you?

*Strikes him*

Hence,

Horrible villain, or I'll spurn thine eyes

Like balls before me! I'll unhair thy head!

65

『アントニーとクレオパトラ』ではこういうケースが極めて多く、これは、先ほどの植字工のミスあるいは恣意的な判断ではなく、視覚的にF1ではhalf linesの表示がされていないため、その箇所が韻文 (half lines) なのか散文 (prose interjections) なのか区別がつきにくいからである。

#### IV 最後に

以上、F1に印刷されている散文を、そのまま散文として良いのか、韻文に書き換えるべきか、その判別がつきにくい例を挙げてきたが、本報告にあげたのは、数多くある中の数例にすぎない。そもそも、本作品では、韻文と散文の境界が曖昧な箇所が多く、韻文として書かれた台詞も、散文的要素を持っていることがある。例えば、“Approach, there!—Ah, you kite!—Now, gods and devils,” (大修館 3. 13. 91) というアントニーの台詞は、この一行で韻文となっている。しかし、ダッシュによって区分され、命令文 (Approach, there)、罵倒 (Ah, you kite!)、間投詞的語句 (Now, gods and devils) という三つの要素から成るこの台詞は、散文的韻文と言ってもよい微妙な世界を作り出している。『アントニーとクレオパトラ』を校訂する際に生じた、「韻文か散文か」という書誌学上の問いは、こうしたシェイクスピアの後期の作品に見られる「韻文の散文化」という問題とも関連づけられる問いであるが、このような文体上の大きな問題については、今後の課題としていきたい。

#### 引用文献

- Bevington, David, ed. *Antony and Cleopatra*. The New Cambridge Shakespeare. Cambridge: Cambridge UP, 1990.
- Hinman, Charlton, ed. *The Norton Facsimile: The First Folio of Shakespeare*. New York: W. W. Norton, 1996.
- Howard-Hill, T. H. *A Reassessment of Compositors B and E in the First Folio Tragedies*. Columbia, S.C.: privately published, 1977.
- Wilders, John, ed. *Antony and Cleopatra*. Arden Shakespeare: Third Series. London and New York: Routledge, 1995.
- 佐藤達郎 (編注) 『アントニーとクレオパトラ』大修館シェイクスピア双書第2集大修館、2023年。

## Verse and Prose in *Antony and Cleopatra*: Issues Involved in Textual Establishment

Tatsuro Sato

This paper discusses editorial challenges encountered in establishing the text of *Antony and Cleopatra* for the Taishūkan Shakespeare Series (2023), which requires editors to reconstruct the text from the earliest printed editions rather than rely on later modernized ones. For this edition, the First Folio (1623) served as the copy-text.

The Folio was typeset by Compositor B and Compositor E, the latter an apprentice whose portions of Acts 2 and 3 contain many instances where lines that should metrically and dramatically be verse appear as prose. The Taishūkan edition therefore restores verse where appropriate.

However, *Antony and Cleopatra* frequently employs prose interjections—comic prose inserted into verse dialogue for dramatic effect. Distinguishing these intentional prose insertions from compositor errors requires careful attention to context, metre, and dramatic function.

A further complication is the presence of half lines—verse lines split between two speakers. Modern editions mark half lines visually, but the Folio does not, making it difficult in some passages to decide whether a short intrusion is a half line or a prose interjection. In some cases, the available evidence does not allow a definitive determination.

Overall, the play presents unusually complex transitions between verse and prose, demanding sustained editorial judgment to separate Shakespeare's dramatic design from inaccuracies introduced during early modern typesetting.